包茂紅　著（北川秀樹　監訳）『中国の環境ガバナンスと東北アジアの環境協力』

本書は、その「はしがき」によれば、北京大学アジア太平洋研究院と桜美林大学による共同研究の一部であり（シリーズ本三冊のうちの一冊）、昨年まで当該共同研究のために桜美林大学に客員教授として来日していた包茂紅氏による自選論文集である。中国語で出版された書籍がまるごと翻訳されているのではなく、これまで日本語で発表された論文を含めて日本語として改めて論文集が編まれて出版されている。

著者の包茂紅氏は、北京大学で歴史学を学んだのち、ドイツのバイロイト大学やアメリカのブラウン大学、イギリスのサセックス大学など各地で研鑽を積んできた、国際派の中堅研究者であり、その代表的著作として『森林と発展：フィリピン森林乱伐研究（一九四六―一九九五）』が掲げられていることから、中国のみならず、世界の事情に通じていることが伺われる。

一方、監訳者の北川秀樹氏は、環境行政の実務者から研究者に転じ、現在もNGOによる実践を並行させていることから、環境問題のとりわけガバナンスの課題に取り組んでいる中堅研究者である。

本書は、中国の環境ガバナンスを中国国内および国際の二つの視点から捉えていることに特徴がある。後者の視点も欠かせないのは、環境問題がもとより越境的であるからだが、中国の場合はとくに「世界の工場」の便益を国際社会が得ており、中国だけが当事者ではないからだという認識が本書の冒頭で明示されている。

ただし、ガバナンスの観点から当事者として当然考察の対象とすべき「企業」については、著者自らが誠実に断り書きを述べているとおり、論述されていない。この欠落は中国の研究状況を反映するばかりでなく、むしろ中国の実態を反映していると思われる。言い換えれば、今後の課題はまさにここにあるだろう。しかしながら、だからこそ研究者の存在意義があるのもまた然りで、研究者が先端に立って社会を牽引していくことが期待されているのである。中国環境問題の研究領域は、研究者の社会的責任が明示されやすく、そのことを健全であると見なしたい。

著者の歴史学出自らしさは各章に現われており、例えば第一章「資源環境と中国歴史の歩み」では、資源利用の歴史として中国史が捉えられている。上田信（二〇〇二）の『トラが語る中国史―エコロジカル・ヒストリーの可能性』（山川出版社）のように詳細な地域の歴史から立ち上げる生態史と比べれば、総じて概括的かつ理論的であり、欧米の研究者によって中国がどのように捉えられているかの分析が著者の真骨頂であろうと了解される。

難点が唯一つあるとすれば、各論の初出や執筆の経緯あるいは口頭発表との関係などが曖昧なことであろう。歴史学出自の著者であるだけに、書誌情報として完備されていてもよかったのではないか、と思われた。

（A5版　二一九頁　はる書房　二〇〇九年九月　税別二三〇〇円）

（小長谷有紀　国立民族学博物館教授）